



とまこまいし
苦小牧市

森林は地球温暖化の原因になる二酸化炭素（CO₂）を吸収してくれる大切な存在です。苦小牧市の住宅街の近くにある北海道大学苦小牧研究林は、森林の自然や野生動物に関する研究をしています。市民に身近で、一部のエリアでは散策や野鳥観察を楽しめます。5月下旬、苦小牧市のこども記者2人が研究林を歩き、木々の果たす役割を学びました。
(斎藤雅史)

北大研究林 温暖化防止に重要

こども記者見ぶん録



CO₂吸収量 木の太さで予測

2人は菅原颯斗さん（北光小6年）と杉山絢哉さん（緑小6年）。研究林はJR苦小牧駅から車で15分ほどの場所にあり、苦小牧の名所、樽前山の火山灰が降り積もった所で、平らな地形やササ類が少ないのが特徴です。研究林技術長の小塚力さん（51）が案内してくれました。研究林では林内を数十カ所のエリアに分け、決まったエリア内では全ての木の太さや体積を測る調査を行っています。小塚さんは「この調査で森林の変化を見ることができ、CO₂の吸収量を予測できます」と言います。

植物は太陽の光を浴びるとCO₂を吸収し、酸素（O₂）を出します。光合成と呼ばれる仕組みの一端で、残された炭素（C）は植物の中にたくわえられます。今回は車道沿いの5平方メートルのエリアから7本の太さを測定しました。

まずは木の種類を特定するところから。2人は、小塚さんから事前にもらった木の特徴が書かれた紙を見ながら、白っぽい



⑤ミズナラやハルニレの木がたくさん生えている北大苦小牧研究林。こども記者の菅原颯斗さん（中央）と杉山絢哉さん（右）に木の説明をする小塚力さん
⑥木の幹の太さを測る杉山さん（右）と菅原さん（いずれも村本典之さん）



⑦ヒノキをけずり、はし作りを体験する杉山さん（左）と菅原さん
⑧森林資料館で毛皮をさわる菅原さん（手前）と杉山さん

資料館でヒノキのはし作り

北海道大学苦小牧研究林にある森林資料館は、3～12月の毎週土曜日に一般開放されています。菅原さんと杉山さんが資料館を訪れ、特別にヒノキの木を使ったはし作りを体験しました。

2人はまず、かなでヒノキをけずっていきます。菅原さんは「かたい。思ったよりも力がいるな」と苦戦しつつも、うまくけずれると「木くずが、すごくいいにおい」と満足げです。

最後に紙やすりで角を取り、つや出し用のクルミ油でコーティングしたら完成です。菅原さんは「大事

にしたい」と笑顔でした。資料館にはヒグマやキタキツネなど森林にすむ野生動物のはく製も展示されており、毛皮は実際に触ることもできます。

杉山さんが「研究林の研究は、私たちの生活と関係ありますか？」と疑問を投げかけます。

「実は関係しているんです」と小塚さん。例えばドングリの量を調べると、多い年はネズミが出やすく、少ない年はヒグマが市街地に現れやすいといった傾向がある、と解説しました。

取材を終えた菅原さんは「資料

館には樹齢400年の丸太があったり、歴史があってすごいと思った」と話し、杉山さんは「（通常は見られない）観測用のクレーンをいつか見てみたい」と声をはずませました。

北海道大学苦小牧研究林 北大が北海道内6カ所と和歌山県に持っている研究林の一つ。このうち苦小牧は約2700年で4番目に大きく、大和ハウスプレミストドーム（札幌ドーム）約490個分の広さです。1904年（明治37年）に札幌農学校（いまの北大）が当時の政府から土地をゆづってもらい、発足しました。市民がくつろぐ場にもなっており、年間のべ15万人ほどが訪れます。

灰色の木の皮とギザギザの葉っぱをながめてみます。

「ミズナラだ」と杉山さんが声を上げ、見事に正解。その後、2人で協力してハルニレやヤチダモなど4種類の木を見分け、巻き尺を木の幹に巻き付け、太さを測っていました。

測定したエリアだけで5年間に約7ト、一般家庭が1年間に排出するCO₂の2軒分を吸収しているそうです。

「木を切ると自然破壊と考えられがちですが、木材を使うのは環境に良いことです」と小塚さん。「木製品は『第2の森林』と呼ばれ、温室効果ガスの排出量の実質ゼロを目指す『脱炭素社会』の実現にとって重要です」と教えてくれました。